



# 消えた街角 富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和34年 百年仕事、東京駅と周辺開発

東京駅が大改造中である。昨秋、東京駅が街になる「と大宣伝の下、構内地下二面の大地下室を整備、賑々しく商店街が開かれた。思えば戦後六十年間、東京駅は稼働しながら戦災修理、改造、増築工事が進められてきた。この休みない工事の中、私は昭和二十六年（一九五二）以来、東京駅を利用して通勤したが、定年までの三十七年間、ほとんど構内通路は安定せず戸惑った。そして昭和六十二年（一九八七）民営化でJRに引き継がれた工事は、まだ八重洲口再開発と本屋の原形復元作業が残っていて東京駅の理想実現には、「世紀を要するかもしれない」。

この大改造の初期、昭和二十三年（一九四八）江戸城外濠を埋め立て、地下大駐車場、国際観光会館第二、鉄鋼ビルを建設、国鉄も長らく不便をかこった八重洲側開発に踏み切り、鉄道会館を建てて呼応、意気を盛り上げた。当時話題となったガラス張り大型駅ビルには、関西から大丸百貨店が進出、便利さで旅行者、通勤客の足を止めた。写真は、そのガラス張り黒基調の鉄道会館と、右にまぶしい白タイルの国際観光会館の対称に目を惹かれて写したものである。しかし外周に人影はまばらで、人力による道路工事が進められていた。

この前年、昭和三十三年（一九五八）六月一日写真の日、国際観光会館の式典会場で、恐縮ながら私は、日本写真協会第一回新人賞を頂戴した。授賞理由は「定点撮影の発想と実践」「子どもの連続千日間成長記録」であった。まだ東京タワーは建設中、普及途上の各テレビ局、全国配信の共同通信社の取材までを受けて緊張した。その中、写真協会会長、春木栄富士イルム社長から、賞状と奨励賞が手渡された。そして壇上の後世名をとどめられる先生方から祝詞を頂戴し、私の記録写真人生は決定した。その模様は、なんと恩師である岩波写真文庫の名取洋之助先生に私の置いたカメラで写していただいた。この破格の盛大さは、当時カメラ愛用者が急増し、日本の写真工業の実力が、世界に認められた事情を物語っていた。

ところで、今や全国に知られた八重洲の地も、大田道灌が後の江戸城の地、武蔵台地の肩に館を構えた頃には、東京湾奥日比谷入江を隔てて望む砂洲でしかなかった。それを二五九〇年、豊臣秀吉から関東統治を任せられた徳川家康は、埋め立てて下町商業地を建設。内濠、外濠を巡らす大城郭構築を進めた。そのとき、オランダ人で外交顧問を務めるヤン・ヨーステンに、外濠に面した土地を与えたが、語呂合わせの巧みな日本人は、そこに八重洲の地名を献じた。

（昭和三十四年五月二十七日 富岡畦草撮影）

文 富岡畦草（とみおか けいそう）  
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



(平成20年1月29日 富岡畦草撮影)

右側にそびえ立つビルは地上43階建の「グラントウキョウ ノースタワー」。地下1階から地上14階までが商業施設で、大丸東京新店がオープンした。左側の建物は、鉄道会館ビル（旧大丸東京店）で、今後取り壊され歩行者デッキを設けることが決定している。その結果、丸の内側への風の通りが良くなり、ヒートアイランド現象の抑制を促す効果が生まれるという。（文：渡辺邦博）

